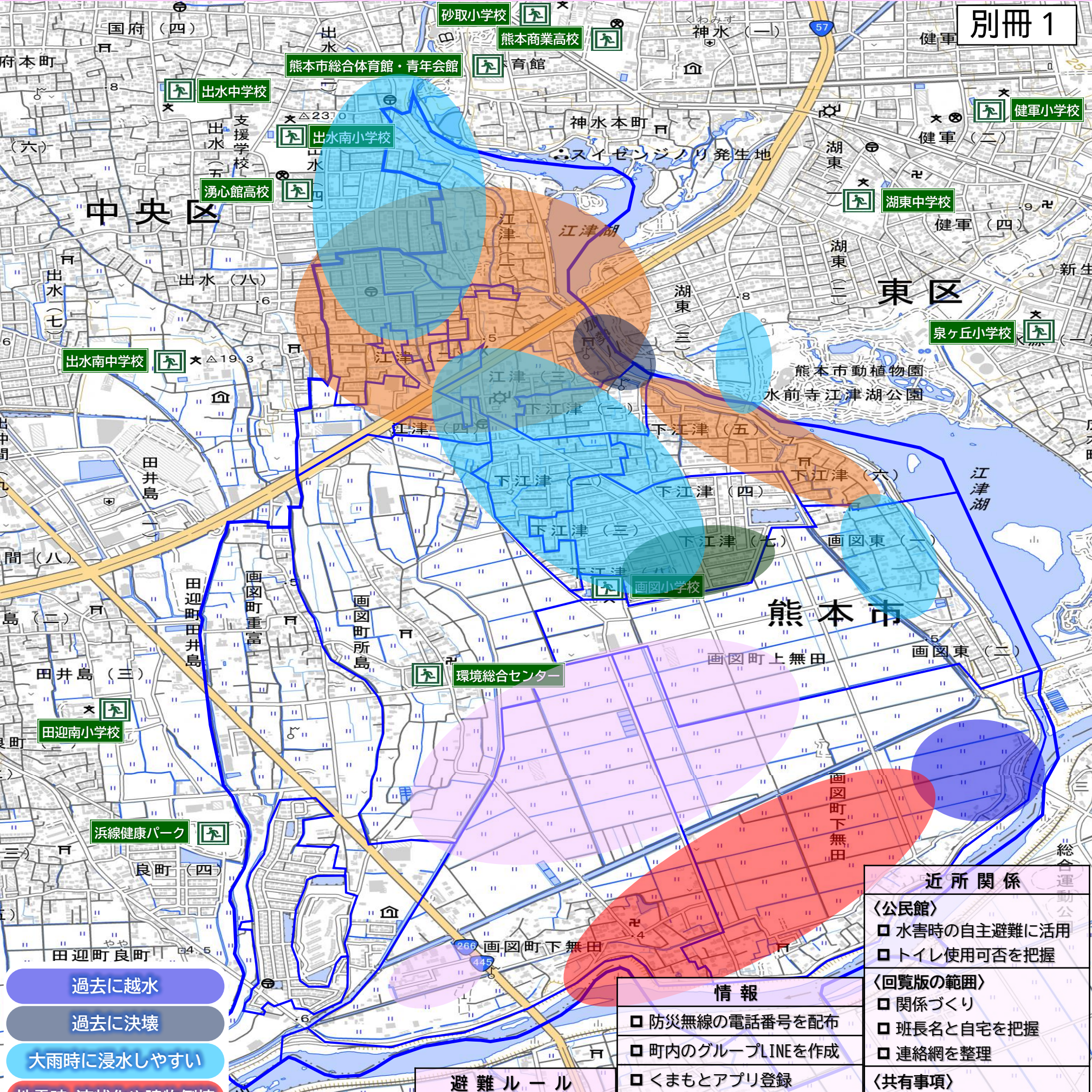


画図校区地区防災計画【防災マップ・校区ルール】

別冊 1



- 過去に越水
- 過去に決壊
- 大雨時に浸水しやすい
- 地震時、液状化や建物倒壊
- 住宅街の道が狭い
- 渋滞する可能性が高い
- 街灯が少ない

避難ルール	
要支援者	☐ 団地は垂直避難
☐ 事前に避難情報伝達	☐ 区外も避難先に利用
☐ 身内が遠方にいる単身世帯は対応を事前検討	☐ 水害時の避難先事前検討
	☐ 道路浸水前に早期避難

情報	
☐ 防災無線の電話番号を配布	
☐ 町内のグループLINEを作成	
☐ くまもとアプリ登録	
☐ 周辺校区の危険箇所を明示	
〈共有事項〉	
☐ 避難ルートの危険箇所	
☐ 内水氾濫情報の周知と確認	
☐ 水害時は川へ近づかない	
☐ 画図小周囲の浸水状況を把握	

近所関係	
〈公民館〉	☐ 水害時の自主避難に活用
	☐ トイレ使用可否を把握
〈回覧版の範囲〉	
☐ 関係づくり	
☐ 班長名と自宅を把握	
☐ 連絡網を整理	
〈共有事項〉	
☐ 非常持ち出し品一式	
☐ 避難情報は防災無線で放送	
☐ 町内指定一時避難場所を設定・周知・共有	
☐ 隣保の福祉施設と関係づくり	

校区の災害・消防情報を受信！
熊本市公式LINEアカウント



熊本市の防災緊急情報は！？
熊本市防災情報ポータル



国交省の防災情報は！？
国交省防災情報提供センター



スムーズな避難所受付に！避難状況把握に！
くまもとアプリ



熊本市の防災全般は！
熊本市防災サイト



避難情報、避難所・ライフライン情報、災害支援状況の把握
FM791インターネットラジオ

「放送がよく聞こえなかった?」そんな時は！！【防災行政無線放送確認ダイヤル：☎096-351-6361】



枠のどちらかにチェックしましょう。

避難方法検討の目安です。浸水想定区域外でも浸水する場合や想定される浸水深を上回る場合もあります。土砂災害警戒区域の場合、発生してから避難することは、困難であり原則、水平避難とします。

熊本県危機管理防災課
電話096. 333. 2811

に！！明るいうちから早めに避難するモン

警戒レベル	レベル1	レベル2	レベル3 危険な場所から高齢者等は避難	レベル4 危険な場所から全員避難	レベル5 命の危険・直ちに安全確保
行政からの情報		自主避難等注意の呼びかけ	高齢者等避難	避難指示	緊急安全確保
警戒レベル相当の 防災気象情報	早期注意情報 (警戒級の可能性)	大雨注意報 洪水注意報等	氾濫警戒情報 大雨・洪水警戒等	氾濫危険情報 土砂災害警戒情報	氾濫発生情報 大雨特別警戒等

共通事項		☐ 天気予報を確認 ☐ 家の点検・補強 ☐ 非常持ち出し品や備蓄品の確認	☐ 防災マップで浸水想定区域と避難経路を確認 ☐ 防災気象情報を確認 ☐ 避難所の開設状況等確認	☐ 家族の所在確認 ☐ 今後の気象状況を確認 ☐ 防災情報くまもとで住んでいる川の水位確認
行動の目安	水平避難が必要な場合	行政が開設する避難所 	避難開始 	避難開始 避難に時間を要する方は危険な場所から避難
	浸水想定区域外の親戚ホテル等	☐ 避難する相手先と連絡を取る。 ☐ ホテルを予約する。 ☐ 避難手段を確認する。		

画図校区地区防災計画【やることリスト】

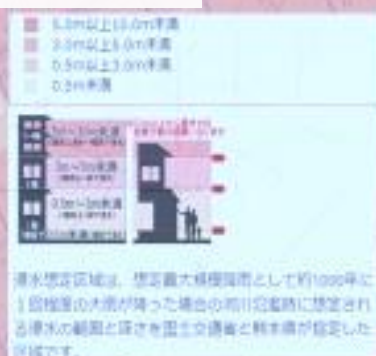
要支援者	避難ルール	情報	近所関係
- 校区・町内での把握 - 日頃からコミュニケーションを図る - 共助の意識を持つ - 近隣の要支援者の把握・関係構築 - 車の使用可能範囲の周知 - 個人情報取り扱いルール検討・設定 - 支援可能者を時間帯で把握 - 支援を要する場合、組長・自治会長へ伝達	〈共有事項〉 - 防災マップの配布とルール把握 - 近所が逃げたら自分も逃げる！！ - 平屋は近隣住民宅へ事前に避難先を確認 - 災害が起きた時のことを準備しておく（食品、ラジオ、電灯等） 〈防災無線〉 - 情報を把握！ - 聞こえているうちに早期避難！ - これらを周知共有！ 〈検討事項〉 - 地域一斉メールの運用の仕組み構築 - 避難小屋の鍵をどうするか（消防団？）	〈共有事項〉 - 自主防災クラブの仕組みを理解する - 町内の防災無線設置状況を把握 - 河川氾濫情報が出たら、近くの住民へ伝達 - 町内放送で早めの行動をうながす - 单身や障がいなど家族数をマップ中に書き込む - 市政だよりなど目を通し日頃から防災にアンテナを広く張っておく - 水位がわかる（見える）世帯は状況を校区内へ情報伝達 1つのメディア情報で判断しない - 防災無線で情報を把握する - 消防団はアナウンスしながら回る - 各団体連絡網（LINE等）を積極的に活用 〈各家庭〉 - 情報発信役を決めておく - 情報伝達が漏れないよう身内連絡網を作成 〈スマホ・携帯〉 - 避難情報を取得 - ない人に情報の取り方を伝え続ける - 防災アプリを入れておく 〈検討事項〉 - 自治協議会HPの活用 - 防災無線がない場合の伝達手段 - 校区内への情報の下ろし方 - 情報を自分のものとしていくための道筋（情報の取り方） - TV、ラジオのニュースをどう自分のものにしていくか - 連絡網の見直し・設定	〈回覧板の範囲〉 - 連絡体制構築（電話・LINE等） - 仲良くお互い様の関係づくり - チームであると毎月繰り返し伝達 - 寄り合い話しあう機会づくり - 年に一度定例会を開催 2か月に1度隣保組長を共有 - 防災アンケート実施 - 防災アプリのURLを周知・共有 - テレビ等で予報が出たら近隣一軒ずつ情報を伝達する - 避難時はまとまる - 避難状況を把握 〈町内自治会〉 - 定期的に話し合う - 町内情報のサイトを二次元バーコードで発信 - 家庭内で備蓄の準備をしておくよう伝達 - 転入者へルールを周知（町内放送・防災マップ） - コミュニティを高める工夫を実施 - 普段から公園や道路等の美化作業などコミュニケーションの場にする - 防災無線が聞こえない範囲（場所）を地図に明示 - 自主防災クラブでの訓練を計画的に実施（最低2回） - 公民館での防災グッズ等の準備 〈各家庭〉 - 近所で避難させてくれるところを確認家族で共有 - 隣近所程度は連絡先を把握し合っておく - 防災グッズ・食料等を準備 〈検討事項〉 - 防災無線以外での情報伝達方法
【メモ】			

熊本市画図校区 地区防災計画

～ 記録編 ～

令和7年(2025年)2月

画図校区防災連絡会



はじめに

私共の住む画図町は、熊本市の清泉・水前寺の南に広がる江津湖の周辺町であります。言い伝えによりますと、天正一三年肥後半国を預かった加藤清正公は入国後、江津湖に堤を築かれたのが、いまの大名塘だそうです。この築堤によって農地の開拓と集落化が進みました。いらい三百有余年、先祖は営々として、荒地や湿地帯を開拓し、水路を掘って四〇〇畝余りの美田を造りあげました。そして名だたる肥後米を作り、子孫を育ててきたのです。しかしこの間、湖面より低い地帯もあり、約二〇畝は大雨のたびに浸水しました。農地や家までつかりながらも、その環境にめげずに、農家としての生産と誇りを伝えてきました。

朝な夕な眺め、生きるよりどころでもあった江津湖は、昭和二八年の大水害で泥土が流入。かつての美しい水辺も一変してドロ沼化してしまいました。

その美しい心のふるさと・江津湖のかつての美をとりもどそうと、三六年から上江津湖の浚渫が始まり、やがてその排土によって県営江津団地が造成。ついでその周辺にも大小の民間による団地がお目見えしました。同時に、農業の近代化も促進されました。まず画図土地組合による土地基盤盤備に着手。明治十六年の大豪雨で欠壊した堤防のまいうち捨てられていた「烏ヶ江」地区の埋め立てと区画整理事業も完工しました。この跡地には RKK モダン住宅展が開かれ、新しい家屋が出現して、面目を一新したことはご存じの通りです。

引用元：水郷画図の歴史（画図町史刊行会）「町史刊行にあたって」

昔から大雨に悩まされてきた画図校区。土地基盤整備や河川改修を経て、現在の画図校区の「まち」があります。

平成 28 年熊本地震では、前震・本震の二度の強烈な揺れと幾度とない余震を伴い、これまで経験したことがない自然災害の恐怖を与えられました。その後、長い復興の時期を経て、8 年が経過した令和 6 年。画図小学校は創立 150 周年を迎えています。

平成 30 年に設置しました画図校区防災連絡会では、この記念すべき年に、熊本地震をはじめ過去の災害を踏まえつつ、地域特性や災害リスクを十分に考慮した、校区独自の地区防災計画を策定するに至りました。

いつ起こるかわからない地震への備えはもちろんではありますが、全国で想定外の大雨、水害が毎年発生しております。治水対策が講じられ以前のような冠水・内水氾濫も少なくなっている画図校区ではございますが、いつ想定外の災害が起こっても不思議ではありません。これから、自助・共助の防災意識と、災害に対応できる地域防災力を高めるため、この「画図校区地区防災計画」を通し、校区一丸となり防災に取り組んでいけるよう、校区住民の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

目 次

1 過去の災害	1
2 校区の特性（地形・災害・人口特性）	3
3 画図校区防災連絡会と地区防災計画策定の経緯	7
4 校区内の防災・減災ルール	12
5 やることリスト（実施計画）	13
6 校区の課題（ハード面の整備等）	15
7 今後の運用に向けて	15
8 〈参考〉画図校区の防災(避難所)体制	16



北校舎1階



避難所

熊本災害デジタルアーカイブ／平成28年熊本地震（提供：熊本市）

【表紙の画像】

熊本市ハザードマップ／画図校区浸水想定区域図

1 過去の災害

○昭和2年 台風

- ✓ 台風が目が熊本市上空を通過し、大正5年に建てられた二階建ての校舎が倒壊した。突風で校舎が揺れ、中心部が北側の膨れて弓なりになった。

引用元：続・水郷 画図の歴史（画図町史刊行会）「画図小学校百年誌」

○昭和28年6.26 水害

「熊本市泥水害分布図」より、画図町付近も広く浸水している。

参考：熊本市歴史文書資料室所蔵、都市形成史図集―戦後編―

- ✓ 画図校区でも、町内全般にわたり、床上、床下浸水となり、排水不良のため1週間も減水せず、家屋の被害も甚大であった。阿蘇の火山灰土は上無田地区まで流入し、その後田んぼの管理にも重大な影響をおよぼした。

引用元：続・水郷 画図の歴史（画図町史刊行会）「六・二六水害」

- ✓ 豪雨のため大增水となり、第二校舎は床上浸水。全校四日間の臨時休校となった。校区内に、床上浸水151人、床下浸水190人と大災害をもたらした。

引用元：続・水郷 画図の歴史（画図町史刊行会）「画図小学校百年誌」

○昭和32年7.26 水害

- ✓ 豪雨のため校地が浸水。床すれすれまで浸水し、29日にようやく減水。児童家庭の罹災状況は床上浸水21人、床下浸水190人。

引用元：続・水郷 画図の歴史（画図町史刊行会）「画図小学校百年誌」

○昭和37年7月水害

- ✓ 長雨による洪水のため、二日間臨時休校。冠水のため、下無田の児童は、船で学校に通った。

引用元：続・水郷 画図の歴史（画図町史刊行会）「画図小学校百年誌」

○平成28年熊本地震

- ✓ 避難所であった画図小学校では、開設4/14～閉鎖5/8の間で、最大避難者数は250名であった。

参照：熊本県「熊本地震の対応に関する検証報告書」

- ✓ 豊かな湧水地であることから、各家庭に湧き出る湧水のおかげで、地震の影響による断水時も、生活用水に苦労はなかった。

～ 下無田下公民館にある記録から ～



2016年(平成28年)4月14・16日に発生した、
未曾有の大地震(M7)を私たちは忘れる事は
出来ません。町内での震災の爪痕を
誰かの写真が有り、記録として残り伝えられ
との想いを掲示致しました。
平成29年12月現在、熊本地震の被災状況は
直接死50名、関連死197名、負傷者2,720名、
住宅197,268棟の被災が報告されています。
幸いに、3町内では、人身事故などの無かった事
が報告されています。



2 校区の特性

(1) 地形特性

- ✓ 東区の南西部に位置し、嘉島町と隣接している。北側に国道 57 号（通称東バイパス）、西側に国道 266 号（通称浜線バイパス）の 2 本の主要幹線道路が通っている。北東部には住民の憩いの場となっている上江津湖・下江津湖があり、南東部は木山川と加勢川が合流し、南を流れている。
- ✓ 校区の土地利用状況は、北部～校区外縁部は住宅地、南部～中心部は水田として利用されている。豊かな水で農作物を育むための数多くの用水路も流れる校区内の標高は、南東部が最も低く標高 3.8m であり、北部に向かって緩やかに上昇し北端部で標高 6.4m となる。
なお、校区南部の加勢川の堤防部は標高約 8.0m である。また、校区外縁は加勢川の堤防および旧河川の自然堤防などの微高地に囲まれた盆地となっている。
- ✓ 校区の土地の成り立ちを示す土地条件図では、校区の大部分が氾濫平野からなり、西部は旧河道および自然堤防であることから、画図校区は旧河川の氾濫によって形成された軟質な地盤からなる平地上に位置するといえる。
- ✓ 14 の町内に区分された校区の主な避難所は、市指定避難所である画図小学校と熊本市環境総合センターの 2 か所である。
- ✓ 国道沿線には、ホームセンターや飲食店、さらに近隣には大型ショッピングセンターなどが立ち並び、近年はセイラタウンなどの宅地化が進む一方、国道 57 号線以南には田園地帯が広がっている、新しさと昔ながらの風景が調和した地域である。

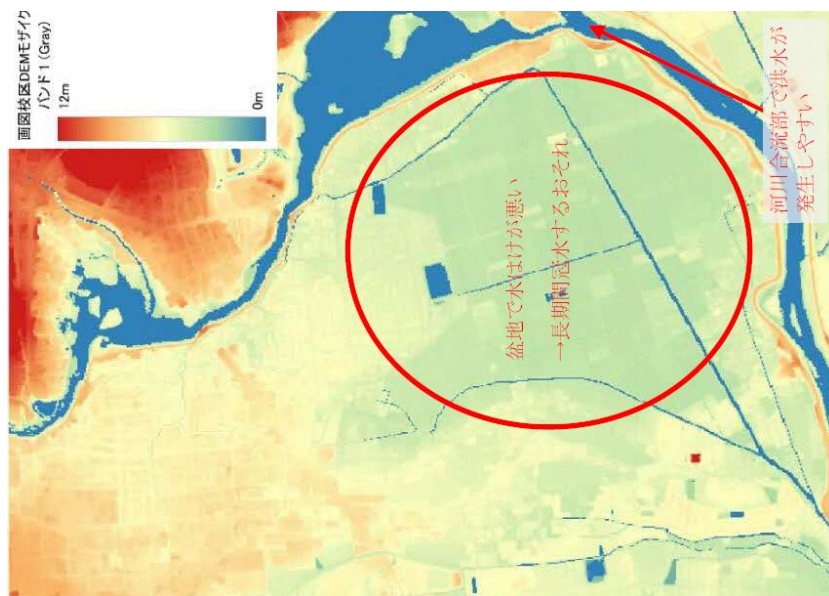


【写真】

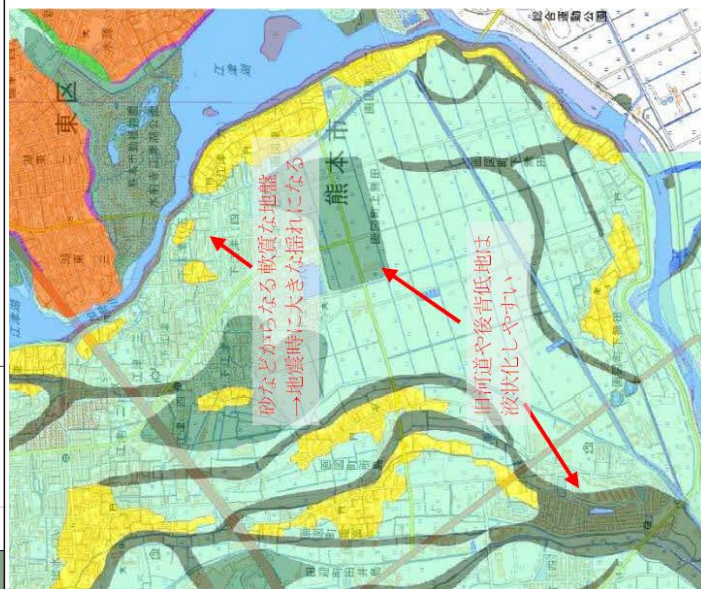
防災ヘリによる上空からの被害状況調査（東区画図町下無田）

熊本災害デジタルアーカイブ／平成 28 年熊本地震（提供：国土交通省九州地方整備局）

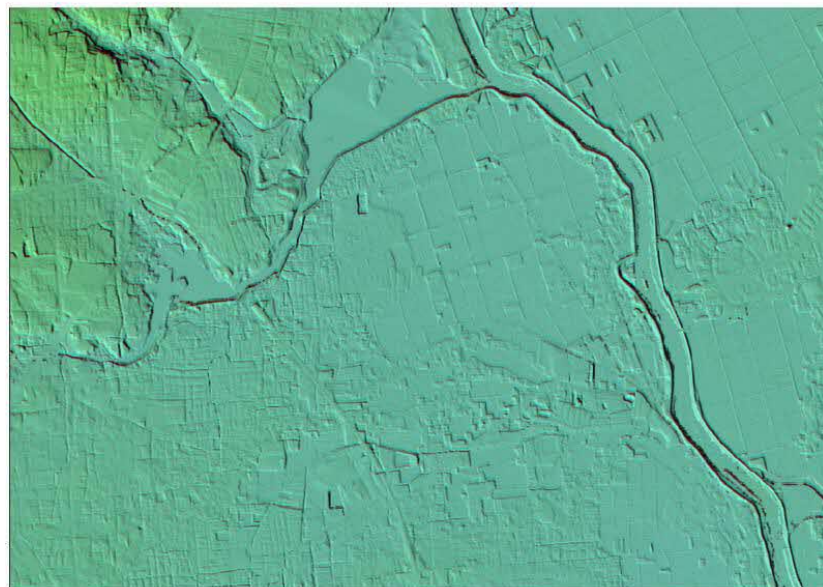
配色	分類項目	説明
	扇状地	河川が山地から平地に出た地点に砂礫が堆積してできた地形。
	自然堤防	洪水時に運ばれた砂等が、流路沿いに堆積してできた微高地。
	砂州・砂堆・砂丘	砂州・砂堆は、現在及び過去の海岸、湖畔付近にあって波浪、沿岸流によってできた砂礫からなる微高地。 砂丘は、風によって運ばれた砂からなる小高い丘。
	天井川・天井川沿いの微高地	河床が周囲の低地よりも高い河川と、その周辺の微高地。
	谷底平野・氾濫平野	河川の氾濫により形成された低平な土地。
	海岸平野・三角州	海水面の低下によって海底が隆化した平坦地や、河口部にあって砂や粘土等が堆積してできた平坦地。
	後背低地	河川の堆積作用が比較的及ばない低湿地。水はけが悪い。
	旧河道	低地の中で周囲より低い槽状の凹地で、過去の河川流路の跡。



【図3】校区近辺の標高図（地理院地図）



【図2】校区近辺の土地条件図（地理院地図）



【図1】校区近辺の標高区分図（地理院地図）

(2) 災害特性

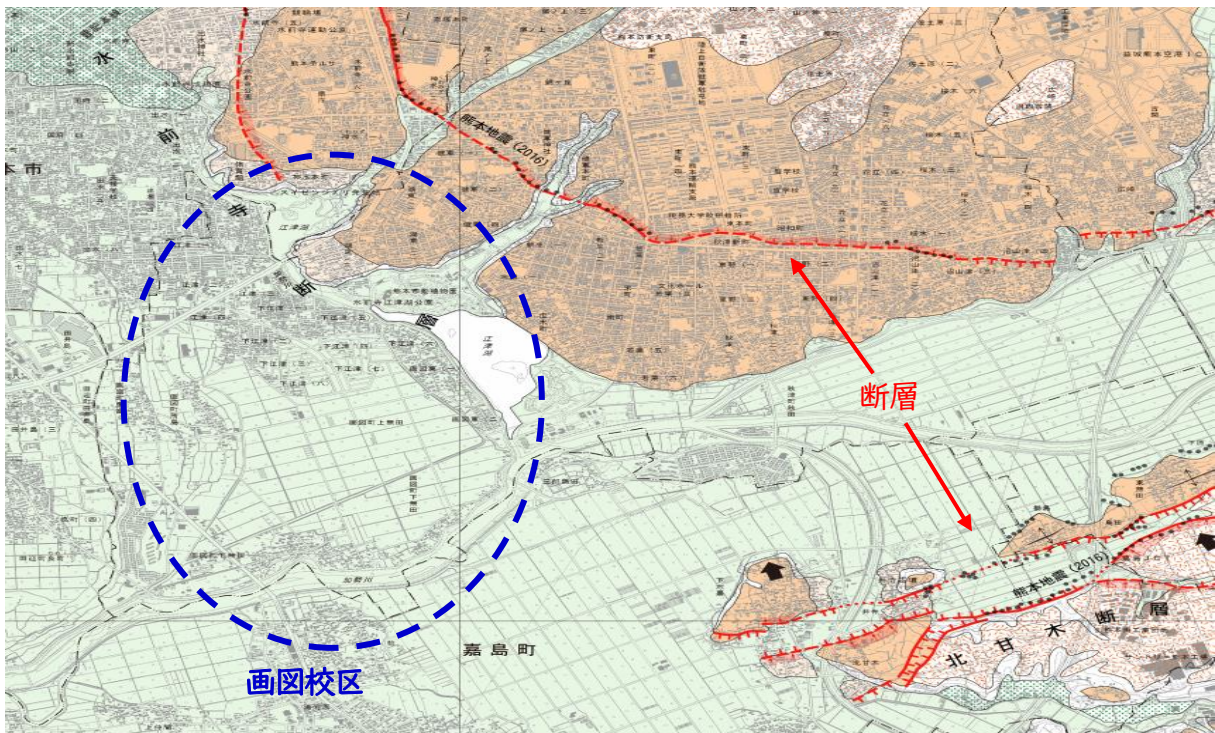
風水害に関連した内水氾濫が発生する恐れと、地震時の家屋倒壊および液状化に注意する必要がある。

〈風水害〉

- ✓ 校区の大部分が氾濫平野からなる低地であり、加勢川と秋津川の合流部付近に校区が位置することから、水害リスクが存在する。
特に校区南部は標高が低く、周囲を堤防や自然堤防などの微高地に囲まれていることから、一度冠水すると長期間浸水する可能性がある。
- ✓ 近年は堤防の改修が進み河川氾濫は発生していないが、近年の降雨状況を鑑みると想定を超える洪水による氾濫が発生する恐れがある。

〈地震〉

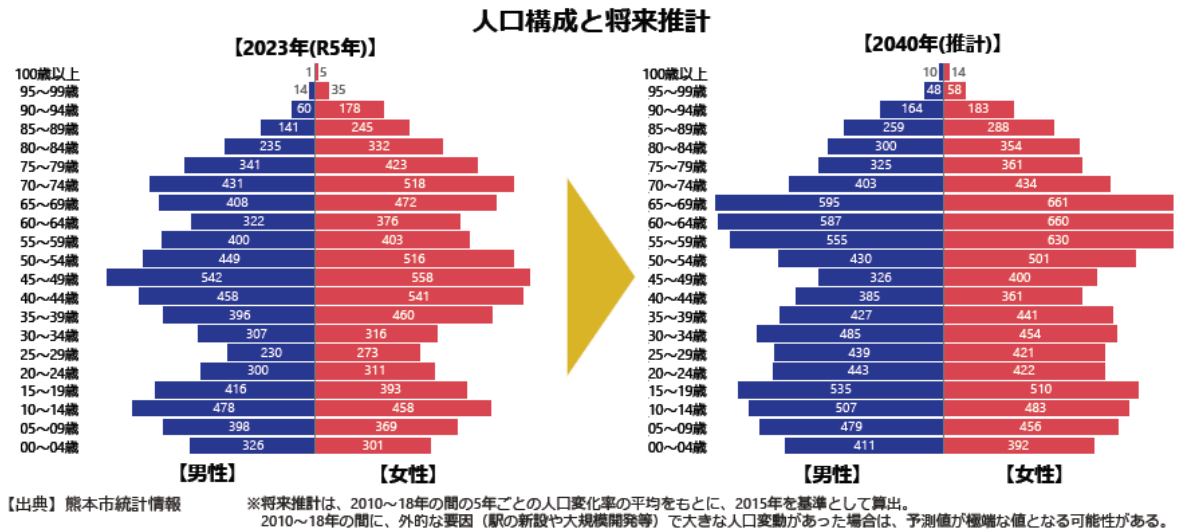
- ✓ 平成 28 年熊本地震を引き起こした布田川断層帯の活断層（北甘木断層）および水前寺断層が校区の近くまで延びているため、これらの断層に起因する地震が発生した場合、大きな地震動が発生する可能性がある。
加えて校区の大部分が氾濫平野であり密度の低い軟質な地盤からなることから、丘陵地と比較し大きな地震動となる可能性が高い。
- ✓ また、校区内に旧河川や後背低地などの液状化しやすい土地条件が広く分布していることから、強震時には液状化による道路変状や噴水が発生する可能性が高い。



【図4】校区近辺の活断層分布（地理院地図）

(3) 人口特性

【人口】 **14136** 人 【世帯数】 **6227** 世帯 【高齢化率】 **27.2** % (市全体： **27.2** %) ※2023年時点



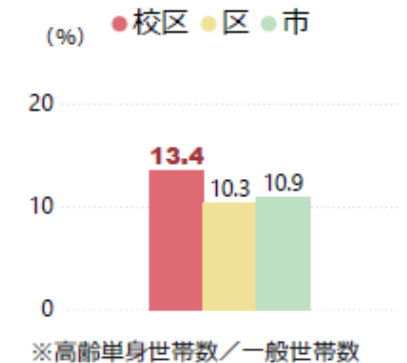
【図5】 画図校区の人口構成と将来推計（「校区健康カルテ」より[令和5年(2023年)時点]

校区人口は約 14,000 人。世帯数は 6,227 世帯。
男女別年齢区分は【図5】のとおりで、女性が多く、
他校区同様 2040 年推計で、60 代が増える見込み。

高齢化率は 27.2%と全国平均 29.1%（過去最高
値）と比較し低い水準であり、市全体と同率。

独居高齢者世帯割合が、市・区平均より高く、災
害時の避難支援に課題が感じられる。

独居高齢者世帯割合(2015年)



【図6】 独居高齢者世帯の割合

校区の

避難行動要支援者

721 名（校区人口の約 5%）

要援護者登録者名簿登録者数

156 名（校区人口の約 1%。）

（令和 6 年(2024 年)1 月 1 日時点）

3 画図校区防災連絡会と地区防災計画策定の経緯

平成 30 年(2018 年)

7月 発足

校区防災連絡会と、2 か所の熊本市指定避難所である、画図小学校及び環境総合センターに避難所運営委員会を設立。

コロナ禍までは、例年防災連絡会で、会員のスキルアップ研修などを行うほか、「校区町民体育祭パンフレット」へ、「保存版校区避難所マップ」、「避難所運営・役割等紹介」、「避難行動の基本」を掲載し、校区内への啓発も展開。



令和2年(2020年)

2月 11・12 町内代表での校区防災訓練開催を企画
(新型コロナウイルス感染症の影響で延期に)

令和6年(2024年)

3月 校区防災訓練 (画図小学校)

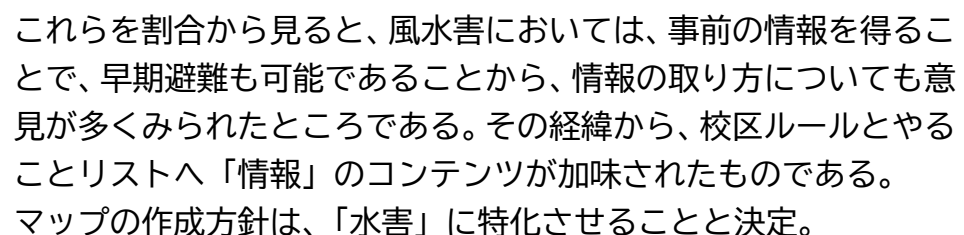
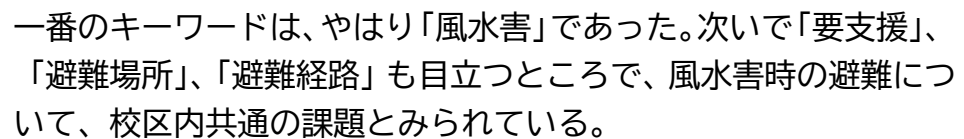
5月 画図小・環境総合センター避難所運営委員会名簿再編成

7月 避難所運営ゲーム（HUG）の体験会開催



10月 第1回ワークショップ開催

第1回ワークショップで出た意見を以下のとおり分析。



あわせて、校区エリアのリスクと課題が抽出された。

校区エリアリスクとして、「過去に越水」、「過去に決壊」、「大雨時に浸水しやすい」、「地震時に液状化や建物の倒壊」、「住宅街の道が狭い」、「渋滞する可能性が高い」、「街灯が少ない」と、過去起きた災害と、避難時のリスクを地図上に図示化。

課題は、水害時は早期避難と情報収集が肝要であることや、近隣での共助などが視野に入れられ、テーマとして、「避難ルール」、「情報」、「近所関係」、「要支援者」の4点に絞られた。これが第2回ワークショップでの深掘りされた。



12月 第2回コアメンバー会議開催 避難所開設・運営マニュアル策定



令和7年(2025年)

1月 第2回ワークショップ開催

第1回ワークショップで意見がでた「回覧板の回る範囲での共助」も見据え、隣接町内でグループを分けて開催。事前に抽出された課題テーマ4点、「避難ルール」、「情報」、「近所関係」、「要支援者」について各グループに深掘りしてもらった。

その結果、各グループでの重要事項をマップに落とした物が画図校区住民全体の共通ルールとなる「校区ルール」に、その他のものがこれから校区で進めていかなければならない、校区防災連絡会の今後の事業計画のもととなる「やることリスト」が抽出された。



2月 計画素案策定

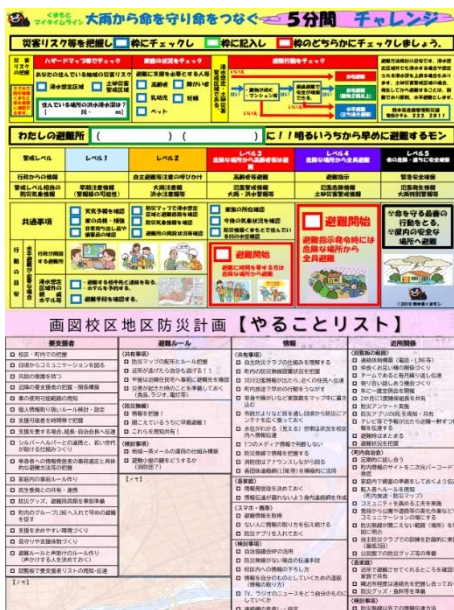
画図校区バージョンでは、全世帯に配布する「防災マップ」を本編として位置付けている。ここへ「校区内ハザード」のほか、重要となる「校区ルール」を掲載。



「校区内ハザード」は、色分けし、わかりやすく掲載。しっかり把握し、注意してもらう。

画図校区住民全体の共通ルールとなるのが「校区ルール」。大きく4つあり、校区内での防災活動や災害時の活動が効率的・効果的に取り組めるよう、これからすぐに、住民みんなに守っていただきたいもの。

「情報収集用二次元バーコード」は、事前に登録できるものは早めに登録してもらい、そのほかは災害時などの情報収集に活用してもらう。



裏面へは、「やることリスト」、「マイタイムライン」、「情報収集用二次元バーコード」を盛り込むつくりとなっている。

「マイタイムライン」は各世帯で必ず記入し、世帯の避難ルールを決めてもらう。

「やることリスト」は校区防災連絡会の今後の事業計画のもととなるもの。

校区みんなが、一目で確認できるよう、しっかり共有できることをねらい作成した。

平成30年(2018年)7月の校区防災連絡会・避難所運営委員会委発足後、令和6年度(2024年度)、地区防災計画を、第1回コアメンバー会議(キックオフ)5名、第1回ワークショップ22名、第2回コアメンバー会議5名、第2回ワークショップ35名、校区約14,000人を代表した延べ67名の住民代表が、アドバイザーの東海大学文理融合学部地域社会学科 安部 美和准教授とささえりあ江津湖様の支援のもと、意見を出し合い策定に至った。

4 校区内の防災・減災ルール

校区全員で実施する具体的な校区ルールは以下のとおりに決定した。

住民は、アプリのダウンロードなどすぐできるものはすぐ着手し、普段から各ルールを心掛け、いざ災害が起こったときはもちろんのこと、防災訓練や例年の出水期には実践することとする。

要支援者	
☐ 事前に避難情報伝達	☐ 身内が遠方にいる単身世帯の場合 対応を事前検討

避難ルール	
☐ 団地は垂直避難	☐ 水害時の避難先 事前検討
☐ 区外も避難先に利用	☐ 道路浸水前に早期避難

情報	
☐ 防災無線の電話番号を配布	☐ くまもとアプリ登録
☐ 町内のグループLINEを作成	☐ 周辺校区の危険箇所を明示
〈共有事項〉 ☐ 避難ルートの危険箇所 ☐ 水害時は川へ近づかない ☐ 内水氾濫情報の周知と確認 ☐ 画図小周囲の浸水状況を把握	

近所関係	
〈公民館〉 ☐ 水害時の自主避難に活用 ☐ トイレ使用可否を把握	〈共有事項〉 ☐ 非常持ち出し品一式 ☐ 避難情報は防災無線で放送 ☐ 町内指定一時避難場所を 設定・周知・共有 ☐ 隣保の福祉施設と関係づくり
〈回覧版の範囲〉 ☐ 関係づくり ☐ 班長名と自宅を把握 ☐ 連絡網を整理	

5 やることリスト（実施計画）

現状ではすぐに実施することが困難であるが、今後実施したいと考えていることは、以下の「やることリスト」に掲載のとおりである。校区防災連絡会、避難所運営委員会の中で、事業計画として一つ一つ達成していくものとする。取組が終わったら（ルールが決まったら）、校区ルールとして整理し、広報などを通じて地域住民の方々に周知していく。

要支援者	□ 校区・町内での把握 □ 日頃からコミュニケーションを図る □ 共助の意識を持つ □ 近隣の要支援者の把握・関係構築 □ 車の使用可能範囲の周知 □ 個人情報取り扱いルール検討・設定 □ 支援可能者を時間帯で把握 □ 支援を要する場合、組長・自治会長へ伝達 □ シルバーヘルパーとの連携と、若い世代が助ける仕組みづくり □ 単身者への情報発信者の事前選定と具体的な避難方法等の把握 □ 家庭内の事前ルール作り □ 民生委員との共有・連携 □ 防災グッズ、避難用具類を事前準備 □ 町内のグループLINE へ入れて早めの避難を促す □ 支援を求めやすい環境づくり □ 見守りや支援体制づくり □ 避難ルールと声掛けのルール作り（声かけする人を決めておく） □ 回覧板で要支援者リストの周知・伝達
------	--

避難ルール	共有事項	□ 防災マップの配布とルール把握 □ 近所が逃げたら自分も逃げる！！ □ 平屋は近隣住民宅へ事前に避難先を確認 □ 災害が起きた時のことを準備しておく（食品、ラジオ、電灯等）
	防災無線	□ 情報を把握！ □ 聞こえているうちに早期避難！ □ これらを周知共有！
	検討事項	□ 地域一斉メールの運用の仕組み構築 □ 避難小屋の鍵をどうするか（消防団？）

情 報	共有事項	☐ 自主防災クラブの仕組みを理解する ☐ 町内の防災無線設置状況を把握 ☐ 河川氾濫情報が出たら、近くの住民へ伝達 ☐ 町内放送で早めの行動をうながす ☐ 単身や障がいなど家族数をマップ中に書き込む ☐ 市政だよりなど目を通し日頃から防災にアンテナを広く張っておく ☐ 水位がわかる（見える）世帯は状況を校区内へ情報伝達 ☐ 1つのメディア情報で判断しない ☐ 防災無線で情報を把握する ☐ 消防団はアナウンスしながら回る ☐ 各団体連絡網(LINE 等)を積極的に活用
	各家庭	☐ 情報発信役を決めておく ☐ 情報伝達が漏れないよう身内連絡網を作成
	・スマホ 携帯	☐ 避難情報を取得 ☐ ない人に情報の取り方を伝え続ける ☐ 防災アプリを入れておく
	検討事項	☐ 自治協議会 HP の活用 ☐ 防災無線がない場合の伝達手段 ☐ 校区内への情報の下ろし方 ☐ 情報を自分のものとしていくための道筋（情報の取り方） ☐ TV、ラジオのニュースをどう自分のものにしていくか ☐ 連絡網の見直し・設定

近 所 関 係	回覧板の範囲	☐ 連絡体制構築（電話・LINE 等） ☐ 仲良くお互い様の関係づくり ☐ チームであると毎月繰り返し伝達 ☐ 寄り合い話しあう機会づくり ☐ 年に一度定例会を開催 ☐ 2か月に1度隣保組長を共有 ☐ 防災アンケート実施 ☐ 防災アプリの URL を周知・共有 ☐ テレビ等で予報が出たら近隣一軒ずつ情報を伝達する ☐ 避難時はまとまる ☐ 避難状況を把握
	町内自治会	☐ 定期的に話し合う ☐ 町内情報のサイトを二次元バーコードで発信 ☐ 家庭内で備蓄の準備をしておくよう伝達 ☐ 転入者ヘルールを周知（町内放送・防災マップ） ☐ コミュニティを高める工夫を実施 ☐ 普段から公園や道路等の美化作業などをコミュニケーションの場にする ☐ 防災無線が聞こえない範囲（場所）を地図に明示 ☐ 自主防災クラブでの訓練を計画的に実施（最低2回） ☐ 公民館での防災グッズ等の準備
	各家庭	☐ 近所で避難させてくれるところを確認し、家族で共有 ☐ 隣近所程度は連絡先を把握し合っておく ☐ 防災グッズ・食料等を準備
	事項検討	☐ 防災無線以外での情報伝達方法

6 校区の課題（ハード面の整備等）

ワークショップで出された意見のうち、すぐに取り掛かれるものや今後計画して取り掛かる予定のもの以外に、ハード整備など住民だけで対応が困難な意見も出た。これらについては、校区の課題とし、「やることリスト」とは別で検討していくこととする。

自治会	□ 未加入者・脱退者が増加 □ 日常的な情報共有不足 □ 回覧板単位の付き合いが難しいことも（声掛け不用と言われることも…）	避難	□ 水害時の避難方向の案内設置 □ 用水路が多いため、避難ルートが見にくい □ 指定避難所まで避難するには遠い、危うい □ 周辺校区の危険箇所がわからない。
防災無線	□ 防災無線の設置と定期放送の検討 □ 防災無線のない町内がある（1・8・9 町内）、設置状況もわからない □ 防災行政無線を聞いたことがない（新たに設置してほしい） □ 町内のアナウンスの開発	要支援者	□ 要支援者であるとの個人情報に予めの情報共有が難しい。 □ 要支援者が災害時に声をあげられるようにするには？ □ 単身世帯の要支援者で近くに家族のいない人の対応 □ 予め個人情報を共有することが難しい
その他	□ 水害対策（救命胴衣等）の準備や自治体での救難道具（ゴムボート等）の確保要請 □ 自主防災クラブと自治体との協同連携 □ 画図第2排水機場の稼働状況の把握		

7 今後の運用に向けて

地区防災計画は、住民等が居住する地区の災害リスクを把握、その対処法を検討したうえで、それを実施する方策などを自ら定めて作成するものであり、地区の特性に応じた計画です。この計画は、熊本市地域防災計画へ、その一部として掲載を提案できます。掲載されたものは、いわば、校区と行政の役割分担を明確にするものとなり、校区として、地区の防災力を強化するためにどのようなことを実施していくかを提示するものとなります。

この計画を通じて、校区と行政との連携を益々強化し、校区の防災力を向上していきたいと考えます。

そのため、本計画策定後は、住民全体が「校区ルール」を実行することと、校区防災連絡会が主体的・継続的に、「やることリスト」を形にしていけること、随時計画の見直しを進めていくことが重要となります。

さらに、校区全体の防災力を強化するためにも、校区防災連絡会が受け皿となり、広報誌や各団体の集まり、イベント等を通じて、危機感を持ちつつ、地区防災計画の内容と、「自助力・共助力」強化の必要性について周知していきたいと考えています。

本計画が、校区住民の皆さんの協力によって、画図校区全体の防災力向上に役立ち、ひいては、画図校区が、より安心・安全で住みよいまちになっていくことを願って運用していきます。

8 〈参考〉画図校区の防災(避難所)体制 (避難所運営マニュアル抜粋)

避難所開設フロー図

